

再び「繋がる」日本語について

～コミュニティーとソサイエティ～

シンキング・バース

日本語研究班

核家族化後の日本と
コミュニティーの再生

日 本社会の戦後の変遷の中で、たびたび指摘されて来た現象のひとつに、「核家族化」があります。家族や親族がひとつ屋根の下や隣近所で暮らす大家族の形態が壊れ、親子を基本とした世帯が、家族単位になる変化を指したことばです。いわゆる戦後復興や経済成長は、流動人口を増やし、都市部への人口流入が、結果として地方の農村部を中心とした大家族の形態を、分解現象のように壊して行きました。ボク自身、その「核家族化」を、身をもって体験した一人です。

こうした家族の分解現象は、その後も進行し、シングル・マザーなどの一人親世帯、家族や親族と離れて暮らす独居世帯、あるいは、無配偶者・無親族の孤立世帯を生んでいるのが現状と言えるでしょう。ボクは、戦後の「核家族化」は、日本の産業社会が高度化する必要条件であり、古い家族的因習の悪弊（例えば個人の権利の軽視や集落的規範の強要など）を壊すという意味では、一定の役割を担ったと思っています。ただ、その現象の進行に歯止めが掛からなくなり、家族間のDVや幼児虐待、あるいは孤独などを生み、自然災害時の共助にも影響を及ぼすとして、「コミュニティーの再生」が唱えられているのでしょう。

●「共同体」と言語

家

族に限らず、ヒトとヒトが共同生活を営む場は、何らかの規



範を必要とします。「コミュニティー」は、かつては「共同体」と日本語訳されたことばですが、社会学用語としての「家族共同体」「地域共同体」などのほか、「運命共同体」のような使用例がありました。

「コミュニティー」は、“com”という接頭辞を持つ用語で、何らかの「共有観念」がある概念と言えます。日本語的には、「村」のイメージが強く、前近代的な「暗黙の了解が支配的な地域集団」と考えられて来ました。社会学者のテンニエスが概念づけた「ゲマインシャフト (Gemeinschaft)」に近いイメージです。

「地域共同体」は、言語的観点で言えば、「地域のことば (dialect)」を共有するヒト集団でした。かつては訛りの強いことばを共有し合い、異なることば遣いの者を「よそ者」とみなす風習がありました。逆に共同体の成員同士では、地主と小作の関係が根強く残り、いわゆる地縁の親密性（どこそこの誰それはどうのこうの・・・）が、ヒト同士の繋がりやの尺度を表すことがありました。共同体の成員には寛容で、非成員には排他的になる傾向があり、その切り分け要因のひとつが言語でした。「地域共同体」は、地域のことばによる「言語共同体」という側面を持っていたのです。

●ボクたちの地域変化

ボ

クが暮らす市は、市域全体としては人口減少が進んでいます。東北地方の典型的な人口減少自治体のひとつです。しかし、我が家周辺は、若い夫婦が新築住宅を次々に建てて引っ越して来るなど、子育て世帯が増えている地域です。駅まで歩いて15分圏内で、スーパーマーケット、ドラッグストア、コンビニ、各科の開業医などが10分圏内に集中し、その利便性の高さから、若い居住人口が増えているのでしょう。必然的にその住民構成は、「よそ者」が増え、古くからの住民もいるため、新旧が入り混じった居住空間になっています。親子単位の家族が多いとはいえ、三世代家族もいて、多様です。ボク的には好ましい傾向と感じていて、生活環境としては恵まれていると思っています。子供たちの使用言語から、強い訛りを聞くことはほとんどありません。

そのような生活環境で形成されるコミュニティは、当然かつての「村」のイメージとは大きく異なります。造成団地ではないので、すべてが新規住民ではありませんが、「共同体」という日本語を使えるほど濃密な繋がりはないのです。半面、ママ友や高齢者間などで、一定の距離を保った繋がりが形成されています。その状態を表す日本語は、ボク的にはやはり、「社会」がふさわしいと思います。

●「社会的関係」と「お付き合い」

ヒ

トの生活空間を表す用語は、職場であれ、地域であれ、ヒトとヒトの関係性を内包しています。つまり、「繋がり」の要素は、明示的であれ、暗示的であれ、その用語には必ず含まれるのです。仮に「社会」を、「世の中」や「世間」と言い換えたとしても、その用

語は、ヒト同士の「繋がり」と無関係ではありません。まさにヒトは、「社会的動物」だからです。

テンニエスは、産業社会の進展に伴うヒト集団の形態変化を表す用語として、「ゲゼルシャフト (Gesellschaft)」という概念を用いました。言語的に言えば、「暗黙の了解」から「言語化した上での了解」が必要となる繋がり of 総称と言えます。言語のちがいによる「よそ者」の排除など論外です。

その社会的関係または社会的繋がりを表す日本語は、残念ながら適切な用語があるとは言えません。文書で約束事を示す「契約」や広域的な繋がりに用いる「ネットワーク」などがありますが、前述のボクの街のコミュニティーのような、曖昧な繋がりを表すには不適切です。「絆」と言えるほど強いものではないし、「知人」では少し弱いと言えます。また、都会のマンション暮らしのように、隣人と没交渉ではありません。

元々「社会」は、多様な要素を含んだ概念です。しかし、例えば「反社会的勢力」「無縁社会」「孤独社会」のようなネガティブな事象を表す用法、「社会主義」という特定のイデオロギーを表す用法があるため、誤解が生じやすい用語です。ただ、「会」という漢字は、“society”の「お付き合い」と連動するのですから、お付き合いこそ「社会」です。ボクたちが「社会的関係」「社会的繋がり」と言っているのは、つまりは「お付き合い仲間」のことなのです。

例えば近所づき合いが面倒で、その「お付き合い」を止めたヒトがいたとして、そのヒトを「地域社会」に呼び戻すには、「お付き合い」を回復する必要があります。そのためには、そのヒトへの日本語の見直しが必要かもしれません。「社会」を良くするのはことばから。その視点は必要なのです。

(2019年12月9日)

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
再び「繋がる」日本語について

2019年12月9日（初版）発行

著者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。